

James Purdy 小論

——父親捜しと initiation (Malcolm を中心として)——

長谷川敬子

この物語 *Malcolm* は、Malcolm という mindless な少年が突然いなくなった父親を捜しながら、何人かの人々と出会い、様々な遍歴をしてゆく話である。

Malcolm は、豪華なホテルに住み、そのホテルの前の陳列品のベンチにすわって父親を待っていた。父親は Malcolm が18歳になる時までの服をそろえておいて消えた。Malcolm が今まで習った事といえばフランス語と Verlaine の詩だけである。その実フランス語はできない。このように全くゼロの状態の Malcolm は占星術師の Mr. Cox に出会い、Cox の与える address によって彼の遍歴は始まる。黒人の葬儀屋である Estel Blanc が最初の address であった。美しいバリトンの声の持ち主であるこの Blanc (黒人であるが「白」^{フラン}という名) は、最後に Malcolm が死ぬ時、白い馬にまたがって Malcolm の夢に登場する。いわば死の symbol として作品に描かれている。次の address は侏儒と大女の家であった。侏儒の Kermit はハンサムであり油絵画家であるが、自分が小人であることを決して認めようとしな。一方妻の Laureen は岩乗な太った女で腕の良い速記者であるが、売春婦である。しかしこの二人は別れる。大女の Laureen が家を出ていってから Kermit の人生が始まる。出発点に立っている点で Malcolm と Kermit は同じようであるが、Kermit には結婚や女の経験そして才能があるが、Malcolm に残っているものは父親の記憶しかない。第三の address は、城に住む Madame Girard のものであった。Madame Girard は十人ほどの若い男を侍らせ、すべてが金で売買できるものと考えている人物である。Malcolm の4番目の

address である Eloisa という女流画家の家で、Madame Girard が誤って剝製のふくろうを傘で落としてしまい、そのふくろうが羽とごみの山になりはててしまう場面も、彼女の1つの character を示している。Girard 夫妻にとって結婚とは victory をかけた競争であった。Girard 夫妻の結婚をつないでいたものは愛では決してない。それゆえ子供のない Mr. Girard が Madame Girard と離婚し、かつて小人の妻であった Lauren と結婚するのは財産後継者を求めている為であるということ は明白である。財産の後継者を欲するアメリカ文明社会の symbol である Mr. Girard が売春婦と結婚するという事柄は一種の irony と受けとれる。“Leave me Madame Girard” の章における Madame Girard と Mr. Girard の会話によって、二人の character は一層明確に示される。

“You have ceased to exist,” he told her. ...

“I will always be Madame Girard. A command from you cannot destroy my identity.” ...

“I am Madame Girard,” she went on. “The whole world has always known me as she, the whole world will not so quickly lose its memory.”

“The world remembers only what power and money tell it,” he spoke to her like one who merely reads from a document.

“And my power and money now decree that you no longer exist.”⁽¹⁾

name というものにこだわり、name そのものが自分の存在の証しであると信じている Madame Girard。そんな Madame Girard の唯一の存在証明である彼女の名前を簡単に抹消することが可能な Mr. Girard。権力と金だけで成り立っている世界である現代アメリカ社会機構の化身として Mr. Girard を登場させることにより、Purdy は、一個の人間存在をいともたやすく消し去ることが可能な現代文明社会というものを、

一種 black humour のような皮肉をきかせて見事に描き出す。Girard Girard は Malcolm を欲しがらる。離婚した Girard Girard は植物園で、Malcolm の父の代わりになろうと申し出る。Malcolm は怒るが、しかしホテルのベンチを離れて address でいろいろな人と出会ってきた Malcolm には、もはや戻れる場所がない。そして、自分自身も声変わりをはじめ、大人への仲間入りをはじめている自分に次第に気がつくのである。Malcolm は Girard Girard の要求に答えるが、用事があって Girard は Malcolm を植物園で待たせることになる。以前、Malcolm は父の帰りを待ってホテルのベンチで待った。そして父の代わりに申し出た Girard の帰りを待って植物園の石の椅子にすわる Malcolm。この二つの事柄が似ているのは、父も Girard も Malcolm の下へは戻らなかったという事である。結局 Malcolm は父親を見い出せずに終る暗示と受けとれる。Malcolm は Girard が去る時にこう言う。“Please do not go away without me,” これは単に Girard に叫んだものだけでなく、突然いなくなった父への叫びでもある。

Malcolm was already walking in the direction of the sidewalk and the arterial. As he reached the walk, he heard from behind the closing of the tall gates of the horticultural gardens, and the snap as they locked themselves against him.

Standing waiting there, Malcolm was surprised at how quickly night came, and a cool breeze from the west reminded him that summer was over.⁽²⁾

植物園の門が閉ざされることは、もはや Malcolm がこれから自分自身の手で address を見出し、自分で温室も何もない世の中を歩いてゆかなければならないことが示されている。summer was over という語句の響きが、これから大人の世界へ踏み出そうとする少年の試練を暗示する。それと同時に、Malcolm 自身もベンチに坐っていた時の自分に戻

れない事を悟る。質問をしたがるくせもなくなり、自分が何であっても構わなくなっているのである。

そういう Malcolm になすべき残されたものとして Purdy は結婚をもってくる。植物園を出された Malcolm が会ったのは contemporary (現代族)の一人である Gus Brownie という motorcycle に乗った黒人である。Gus は Malcolm を仲間のところへ連れて行き、Melba という Malcolm と同年の歌い手にひきあわせる。Gus は Melba の一番目の夫であったが、Melba の三番目の夫に Malcolm になるのである。しかし夫となるには Malcolm はまだ大人に成りきっていなかった。そこで一人前になって結婚できるようにと Gus は Malcolm を連れて Tattoo Palace (いれずみ御殿) へ行く。

“That’s the place now to be matured,” Gus said, ironical.

Malcolm exclaimed : “My father had a tattoo, and he often said to me, —— ”and in his excitement the boy spit on Gus’s face, for which he immediately apologized, “My father said to me, ‘One day you must be tattooed, son.’”⁽³⁾

ここで問題になるのは、いれずみをするこの意味である。Malcolm の父はいれずみをしていた。そして、いつかいれずみをしなくてはいけないとは何を意味することであろうか。Malcolm 自身も ‘one or two tattoos for wedding is surely...well, usual’ と言う。いれずみすなわち肌に傷をつけることは、ユダヤ教の「割礼」と似たような意味合いをもっているのではないだろうか。いれずみは、イニシエーションの儀式と関連しているのではないだろうか。Mircea Eliade は彼の著書『生と再生』でイニシエーションの儀式のもたらす意味を述べている。

「大ざっぱに言って、成人式には次の要素が含まれている。第一に「聖所」を用意すること。ここで男達は祭儀の間隔離されてすぐ

す。第二に修練者達をその母親から引き離すこと、もっと一般的には全女性から引き離すことである。第三に修練者達を業林または一定の隔離されたキャンプに押し込めること。そこで修練者達は部族の宗教的伝承を教え込まれる。第四に、ある種の手術が施行されること。普通は割礼 (circumcision)、抜歯、下部切開 (subinsion) だが、時としては皮膚に傷跡をつけたり、毛髪を引き抜いたりする。⁽⁴⁾」

つまり、いれずみもイニシエーションの儀式の一種と見なすことができる。Eliade はさらにこう述べている。

「イニシエーション的試練の大部分は、多かれ少なかれ、復活もしくは再生を伴う儀礼的死を意味する。あらゆるイニシエーションの中心のモメントは修練者の死と、その生者の仲間への復帰を象徴する儀式によってあらわされる。しかし、修練者は新しい人間として生まれ変わる。つまり、別の存在様式を身につける。イニシエーションでの「死」は同時に幼年時代の終焉、無知と俗的状态の終止を意味する。⁽⁵⁾」

まさに Malcolm は、いれずみをすることで大人への加入を成し遂げようとするのである。又、いれずみは18歳以上でないと普通はしないと言う Robinolte の言うことから、いれずみが大人への加入を示していると思われる。Malcolm は黒ひょうと、右腕にはいくつかのカーネーションの花と短剣とを彫る。黒ひょうの意味するものは何であろう。新聖書大辞典によると、ひょうは世界の悪の勢力にたとえられ、黙示文学では、獣は世界勢力の野獣性を象徴しているという。そして黒は悲嘆と死を表わしている。Eliade は前述の著書で、さらにこうも述べている。「割礼が済んだあとすぐ修練者は自ら豹かライオンの皮をまとるのである。すなわち、イニシエーション的動物の神的本質に同化し、そのものとして生まれかわる。⁽⁶⁾」と。Malcolm の黒ひょうのいれずみは、全くイニ

セッションの儀式そのものと見てさしつかえないと考えられる。又ダニエル書や黙示録に出てくるひょうのような獣は、同辞典には、ペルシャ帝国とかローマ帝国を表わしていると書かれている。そうすると、Malcolm の体になされた黒ひょうのいれずみは、さしずめ現代の大帝国アメリカを表わしているとも考えられる。いれずみにより、Malcolm は現代アメリカというものから逃れるすべはなくなったのである。

Malcolm はいれずみをいれる時平然としていたが、Gus は三度も失神する有様であり、Madame Rosita のトルコ風呂の22番の部屋で死ぬことになる。Malcolm はイニシエーションの儀式をなしとげたが、Gus には成しえなかった。Malcolm は Gus の死に対し激しく泣いた。少しずつ変化しながらも mindless な少年を、そこまで感動させ悲しませた Gus の死の意味するものは何であろう。Gus について Melba は Malcolm に次のように語る。

“His tattoos didn't kill him?”

“Tattoos, your mother. Why, Brownie had been halfdead for years. Most of his guts were blown out in Korea. Still, he kept on going. And on what? God knows. ...”⁽⁷⁾

Gus という黒人は、アメリカの魂を象徴していたように思える。Gus 自身、いれずみをする時、Malcolm に、自分は生涯ずっと目をあけ続けてきたから長い長い休息が欲しいと言う。contemporary の Gus が持っていた、George Washington と最初のアメリカ国旗の絵のついたひげそり用のコップを見てもわかる。Gus が死んだ時、Malcolm は人に知らせに行く途中そのコップを落としてしまう。それは20か30の小さな色のついたかけらになって粉々になる。Gus の死は初期アメリカ精神の死と考えられる。

Malcolm は結婚するが、Melba との生活の結果、アルコール中毒と極度の性感覚過敏症で死ぬ。Mr. Cox が言うように、大抵の男がそうであ

るように、Malcolm の結婚も致命的であった。しかし、他に Malcolm のとるべき道は果してあったのであろうか。

Too young for the army, too unprepared to continue his schooling and become a scientist, too untrained for ordinary work — what was left for him but marriage? And in his case, marriage supplied him with everything that he had up to now lacked, and also gave him his unique way of leaving the world, in which he had perhaps never belonged (as some people said) in the first place.

Marriage which ushers most people into life, in Malcolm's case, therefore, ushered him into happiness — and death.⁽⁸⁾

ゼロの状態の Malcolm にとって結婚以外のどんな道もなく、結婚は彼になかったものを与えてくれたのである。それは幸福と死までも。

Malcolm の数々の遍歴を通して、いつも彼につきまとっていた「父親探し」を無視することはできない。父親を捜すということに関していえば、Malcolm の場合、明らかに二つの意味がある。一つは男色の意味をもつものである。Malcolm が習ったことといえば Verlaine の詩だという。このことから男色の傾向は見られる。Verlaine といえば Rimbaud と同性愛の関係があり、事件までおこした詩人である。Kermit という俳優との会話から、Malcolm はすでに童貞ではなく、その上、そういったことは、女の子を相手にするものだとは思っていないのである。又、Melba とナイトクラブに出かけた時、Malcolm は父親に似た人を見つけ、しつこくつきまとう。そのためその男から男色者とののしられ、なぐられる破目になる。もう一つの意味とは、本来の父親探しのもつ theme のことである。父親探しの theme を述べる前に、まず父とは何を意味するかを考えてみよう。Erich Fromm は著書 *The Art Of Loving*

の中で父親を次のように定義している。

… But while father does not represent the natural world, he represents the other pole of human existence ; the world of thought, of man-made things, of law and order, of discipline, of travel and adventure. Father is the one who teaches the child, who shows him the road into the world.⁽⁹⁾

Malcolm も父親とよく旅行したと言っていることから、Fromm の言う意味の父親と Malcolm の捜す父とは同一のものと考えられる。父親は人間存在の他の極であり、別の世界を意味しているとなると、父親を捜すということは、神あるいは別の存在を捜し続けて漂泊することを意味している。Malcolm の場合、彼の漂泊はどのようなものであったであろう。ナイトクラブの男色騒動のあと、Malcolm は Melba に言う。

“Maybe my father never existed,” Malcolm said, and his tones were now like those of Melba’s.

“Who the hell knows if anybody ever existed?” she said, but her old gay manner was missing.⁽¹⁰⁾

父親の帰還をひたすら信じていた Malcolm の口から “never existed” という言葉が出る。Melba の「誰かが存在していたなんて誰にもわかりはしないでしょう。」という言葉がそれに続く。父を捜し求めている Malcolm の漂泊は、ある意味では、自分自身の存在の認識を求めて漂泊していたともいえるのではないだろうか。contemporary の Gus が死んだ後、彼にできたことはただ歩き続けることだけだった。‘All he knew he could do was keep walking.’ というこの one sentence が Malcolm の漂泊(遍歴)を表わす key sentence であると思う。Malcolm の四番目の address である Eloisa の家の描写に次のようなものがある。

Everywhere in the house, no matter at what hour, one felt that it was afternoon, late afternoon breaking into twilight, with a coolness, too, like perpetual autumn, an autumn that will not pass into winter owing to some damage perhaps to the machinery of the cosmos. It will go on being autumn, go on being cool, but slowly, slowly everything will begin to fall piece by piece, the walls will slip down ever so little, the strange pictures will warp, the mythological animals will move their eyes slightly for the last time as they fade into indistinction, the strings of the bass will loosen and disappear into wood of the instrument, and the beautiful alto sax shrivel into foil.⁽¹⁾

家の中は午後のように、永遠に続く秋のよう。そしてそれはいつまでも秋のままで冷やかな涼しさが続いていくけれども、ゆっくりと、大変ゆっくりと何もかもが少しずつ崩れてゆく…。これは *Malcolm* 自身の事にもいえるもので、父親捜しの裏に秘めた自己の内面にある存在の証しが、ゆっくりとほんとうに少しずつ崩れてゆくことをこのパラグラフは物語るのではないだろうか。

この *Malcolm* は単に大人の世界に入ろうとする一人の少年の自己探求の話というのではなく、文明化された社会の中で、自己の存在を求めてさまよい歩く人間、*Malcolm* に代表された現代人の *identity* が、今や喪失されつつあることを物語るものである。

Purdy は、彼の作品の中で容赦なくアメリカの汚点をさらけ出し、その中で蠢きひしめき合う人間達を残酷なまで *grotesque* に描く。泥沼のような実社会における人間達の存在の不明瞭さを、本当の愛を忘れ利己的な愛しかもたぬ人間達を作品の上に彷徨させる。

愛するということは、その愛の対象をその存在の本質から理解し、受

け入れることである。それゆえ、その人間の存在というものを認識できないとすれば、愛するということが不可能である。また人が人を愛するには相手に与えるだけの豊かさがなくてはならない。しかし、現代社会においては、崩れゆく自己の存在に脅えるだけで、あるいはその自己の存在の証しとして人から何かを求めこそすれ、与えるものなど何一つないのである。しかし人々は愛することをやめようとはしない。つまり、人を愛することはある意味では自己の存在および相手の存在の確証ともなるからである。

Purdy のこのような不毛の愛という theme は、彼の作品 *Eustace Chisholm and The Works* でも描かれる。その作品の Hero はインディアンとの混血青年 Daniel と、真昼の太陽のような美少年 Amos である。二人の愛は、同性愛という形で描かれていることでもわかるように、決して結実することのない愛なのである。同性愛は実りなき愛であり、実りなきがゆえに永遠のものでなく（愛 amour の語源の意味するものは、死なきもの。）、それゆえ同性愛は愛の本質である永遠性をもたぬ不完全な愛なのである。しかし Purdy は、Daniel と Amos を登場させて同性愛というものを単純な意味で描いているのでは決してない。Daniel は Amos を真に愛することができぬがゆえに多くの苦しみを負う。軍隊に入ってから上官の同性愛者である Stadger により絶えることなき肉体の責苦を受ける。試練と拷問の毎日を Daniel に課すことで Purdy は、Malcolm と同様 initiation 的な意味を加えている。initiation による責苦と死とは、その苦しみと死の体験により新しい靈魂と新しい肉体、新しい存在として生まれ変わることを意味しているのである。すなわち、別のものへの再生のための死であり、キリストの死と同様、死ぬことにより復活して高次の存在として生まれ変わるのである。Daniel は Stadger の最後の拷問で陰部を切り裂かれ、やがて死ぬ。Daniel で表象される傷つき破滅の道を進むアメリカという国は、果して再生しうるのであろうか。

Cabot Wright Begins では特に、Cabot を強姦魔に仕立てあげた巨大

な社会機構であるアメリカという漂うだけの冷凍クラゲの国を諷刺する。次第に個性も実体も感覚もすべて人間の存在そのものが蝕まれ抹消されてゆく現代の社会機構で、そこに生息する人間達に一体何が可能であろう。肉体的にも精神的にも麻痺状態にいる人間達にとって自己の存在を捕えることが不可能な事は *Malcolm* でも Purdy は描いたが、Cabot という Hero を描くことで Purdy は、無という存在であることを悟った人間達が何かを begin できることを信じているのである。

初期アメリカ精神はすでに崩壊し、存在の証しも立証できず、永遠の存在の symbol である愛するという行為もゆがんでいる現代社会に、大いなる試練と拷問を与え、死から再生することを一番待望しているのは誰もいない James Purdy 自身なのである。

註

- (1) *Malcolm* pp. 153—154. Farrar, Straus & Cudahy, 1959.
- (2) *Ibid.*, p. 167.
- (3) *Ibid.*, p. 180.
- (4) Mircea Eliade 『生と再生』(堀一郎訳) pp. 20—21. 東京大学出版会, 1971.
- (5) *Ibid.*, pp. 8—9.
- (6) *Ibid.*, p. 56.
- (7) *Malcolm* p. 196.
- (8) *Ibid.*, p. 207.
- (9) Erich Fromm : *The Art Of Loving* pp. 35—36. A Bantam Book, 1956.
- (10) *Malcolm* p. 204.
- (11) *Ibid.*, p. 114.